上の図の実線部分は菱型である。高収入層と低収入層が少数人であることを示している。中間収入層が多数人である。中間収入層は社会に対して同調感が比較的高いため、この型の社会は安定している。しかし、低収入層が大多数になれば、中間収入層は少数になり、点線で示した三角型に変わる。低収入層は社会に同調感が強くないため、あるいは同調感を持たないため、不満を抱えてしまう。あるいは社会を報復の対象にする。こうであれば、社会の安定は難しくなる。この知見から、中国ではこのような貧困層あるいは自己感覚の貧困層の階層が存在していることが分かり、ひいては不安定の要素が沢山存在している。社会収入格差が拡大しつつあるところについて憂慮している点が多いと思う。

以上の分析と説明によれば、中国の利益構造の健全化がよくなった点は、一つの裕福の層ができて、無から有に変わっている。また一つの中間層ができて、小（少数）から大（多数）に変わっている。これは合理的な利益構造の形成に至るまでの前提である。このような利益分化がなければ、利益格差が生じないはずである。如何に合理的利益分配のメカニズムを論じるか？現在の問題は、低収入層が大きすぎ、中間収入層が小さい。そして裕福層がまた成熟に至っていない。素質を高めるまでの時間が必要である。

私が主張したいのは、社会構造は非常に範囲の広い概念であるということだ。以上のいくつかの面では、われわれが行った研究に限っている。私が担当している「九五期間」（1996年－2000年）中国社会学唯一の重大課題「体制転換期の中国社会構造の現状、変遷および発展趨勢の研究」の中で、もっと深く掘り下げて研究を推進したい。

六、

以上述べてきた「現実に立脚する、伝統を高揚する、海外に学ぶ、特色を創造する」は全体的な研究方向であり、それを具体化するのは世紀の移り変わり目にある中国社会学研究の四つの趨勢[15]の存在である。すなわち中国社会学の本土化、国際化、総合化と成熟化という趨勢である。

第一、中国社会学の本土化趨勢

中国社会学の誕生と発展は、主に「西学東漸」[16]の結果である。したがって、社会学誕生の日から本土化あるいは中国化という問題に直面している。本土化について早くから議論があった。「資料の本土化」という説がある。すなわち本土化を「理論は外国のものであるが、資料は中国のものである」として理解している。または、「対象の本土化」、「理論の本土化」および二者を同時に本土化などの説がある。社会学の本土化について、以下のいつくかの点に注意を払う必要があると、私は思う。

(1)中国社会学の本土化とは、本質的には中国社会学が中国の現実社会を、正確に描写と解釈を行い、社会発展の前景を予測し、中国社会の発展に役立つことにある。

(2)今日の中国社会学の本土化の象徴として、中国の特色ある社会学理論と方法の形成にある。中国の特色とは、中国社会学はまず中国の現実社会に立脚しながら、調査、研究、概括、総括を行うことである。同時に、中国社会史と中国社会思想史について、深く研究し、中国の豊富な社会思想資料の中から、悠久な伝統の中から栄養を吸収する。

(3)本土化は対外排斥することではない。本土化自身には海外の社会学を学び、止揚することが含まれている。特に西洋の社会学と日本の社会学である。

現在、中国社会学は、実際このような海外の社会学成果を吸収し、中国の社会主義現代化に奉仕する。中国の特色ある社会学理論と方法のために努力する。次の世紀になると、このような社会学本土化は、社会変容加速期の深化に伴って行われるだろう。

第二、中国社会学の国際化趨勢

中国社会学の国際化問題である。現在、それほど多く聞かれることではないが、国際交流が増して行くうちに、日増しに中国の発展は国際的な注

15）原注⑫：鄭杭生著「関於21世紀中国社会学発展的几点展望」『社会学研究』1997年第2期　『人民日報』1997.6.14第六版　摘要刊登

16）訳者注：「西学東漸」の意味は西洋の学問が東洋のものに変わった。